

Title	シュタイナー幼稚園における演劇の実践と理論
Author(s)	広瀬, 綾子
Citation	大阪大学教育学年報. 2003, 8, p. 123-134
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/10286">https://doi.org/10.18910/10286</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## シュタイナー幼稚園における演劇の実践と理論

広瀬綾子

### 【要旨】

哲学者・人智学者・教育者ルドルフ・シュタイナー (Rudolf Steiner, 1861-1925) の教育理論に基づくシュタイナー幼稚園では、さまざまな教育活動が行われる。本稿ではシュタイナー幼稚園で頻繁に行われるキリスト降誕劇を例にして、教育方法としての演劇に着目する。シュタイナー幼稚園での演劇教育を支えるのはシュタイナーの人間観、教育観であるが、かれは、身体組織・器官の形成、身体活動・運動、言葉を話すことおよび思考すること、道徳性・宗教性の発達を4点を幼児の本性として重要視した。シュタイナーにあつては、幼児の本性を満たすことが、幼児教育の目標とされる。それゆえシュタイナー幼稚園では、シュタイナーが幼児の本性として、また教育方法として最も重視した模倣の原理に基づき、身体組織・器官の形成、身体活動・運動、話す力の形成、道徳性・宗教性の育成の方法として演劇が行われるのである。シュタイナー幼稚園で行われる演劇が日本の幼稚園で行われる演劇と最も異なるのは、教師が先導し、中心となって模範を示しつつ幼児と一緒に劇を行うことであり、これはシュタイナー幼稚園における教育方法としての演劇活動で最も重要なことからである。

### はじめに

シュタイナー教育とは、オーストリア生まれの哲学者・人智学者・教育者ルドルフ・シュタイナー (Rudolf Steiner, 1861-1925) の教育理論およびその理論に基づく教育実践に対する総称である。別名、ヴァルドルフ教育ともいう。シュタイナーの教育理論を支えとする教育実践は、シュタイナー (ヴァルドルフ) 学校およびその幼稚園の設立というかたちで展開され、約80年の歴史をもつ。この学校はわが国の小、中学校および高校の三つの段階を統合した12年制一貫教育の私立学校であるが、幼稚園とも連携しており、すぐれた人間教育として世界60カ国に広まり注目を浴びる。その人間教育を構成するものの一つに、演劇教育がある。シュタイナー学校では「演劇は学校の日常の行事」(カールグレン, F. 1992, 174頁) としてとりわけ重視され、教育の重要な柱として位置づけられている。同様に、シュタイナー学校ほどではないが、シュタイナー幼稚園においても、演劇活動が行われる。しかしこの分野については、わが国ではいまだ紹介されておらず、研究も行われていない。

本稿では、幼児期において教育活動の一環として行われている演劇活動に注目する。本稿の課題は、幼児期の子どもの本性を明らかにし、シュタイナー幼稚園における演劇活動の目的を明らかにし、さらにその目的を達成するための方法の原理を究明することにある。以下、それらを次のような順序で明らかにしたい。①シュタイナー幼稚園におけるキリスト降誕劇②教育の基礎としての人智学的人間観③幼児期の子ども本性と教育の目標④幼児教育としての演劇活動の方法の原理。

### 1. シュタイナー幼稚園におけるキリスト降誕劇

シュタイナー幼稚園では毎年クリスマスの時期になるとキリスト降誕劇がおこなわれる。アドヴェント(待降節：クリスマス前4週間の準備期間)には、人形劇などさまざまな催しがおこなわれるが、キリスト降誕劇はその中でも目玉である。園児たちは、キリスト降誕劇に登場する人物、その他に扮して想像の世界を演じて遊ぶ。わが国でもあちこちの幼稚園で、園児がヨセフ、マリア、羊飼いなどの役を演じるかたちで、キリスト降誕劇が行われるが、シュタイナー幼稚園におけるキリスト降誕劇は、私たちが想像する園児たちの劇とは大きく違っている。私たちが想像する幼稚園児たちの劇といえば、大人の劇の縮小版、つまり園児たちが舞台上で与えられたセリフを言い、教師が舞台袖で園児たちの演技や進行を見守り、客席で親たちが鑑賞するといった形態であろう。当然、舞台の上には園児たちがいるだけであって、教師は

一切登場しない。ところがシュタイナー幼稚園の劇はそれらとは全く異なる。最も大きな違いは、シュタイナー幼稚園では、教師が登場し、しかも教師が劇の中心的な役割を果たすことである。いわば教師が劇の主演である。もう一つは、園児たちがセリフを暗記して一人一人セリフを言うということは一切ないということである。つまり、教師の先導に従い、教師と一緒にセリフをしゃべり、歌を歌い、動作をするのである。

具体的にはこんなふうである。まず、教師がヨセフ、マリア、羊飼いの配役を決め、園児たちは一人一人違った衣裳を教師に着せてもらう。衣裳は劇の雰囲気を出すのに大変重要な役割を果たしている。そして教師主導で教師と同じしぐさをし、ライアー<sup>1)</sup>や笛に合わせてみんなで歌いながら円になる。身重のマリアとヨセフが宿を求める場面では、教師がストーリーやセリフを語り、それにしたがって、ヨセフとマリア役の園児は円の中央に進み出て、宿屋の戸をたたき動作などをする。このような簡単なしぐさもすべて教師が導く。その他の園児たちは、教師と共に歌いながら、教師が「残念ながらこの宿屋は一杯です」と(ヨセフとマリアの申し出を)断るしぐさをまねる。そして3人の博士役の園児たちは、歌にあわせて円の外(まわり)を何周か回ったのち、マリアとヨセフのもとに辿り着き、教師の先導やセリフにしたがって、乳香やもつ薬を円の中央のマリアとヨセフの元にいる幼子イエスに捧げる。ストーリーやセリフを語るのは、共に演じる教師であり、時折、園児たちもその教師がリズムカルに口に出す言葉を、教師と共にみんなで言う。これがいわゆる「セリフ」にとってかわる。歌うことやしぐさ、身ぶりが重視されるが、そのどれもが教師の真似である。

私たちが想像する幼稚園児の劇とシュタイナー幼稚園で実際行われている劇の違いは何に由来しているのだろうか。演劇活動に限らず、教育のあり方について、シュタイナーは次のように述べる。「あらゆる教育と授業は人間の本性についての真の認識から湧き出てこなくてはなりません」(Steiner, R. 1924e, S. 9)。それ故、幼稚園での演劇活動のあり方を理解するために、まずは、シュタイナーが幼児期の子どもの本性や発達をどのように捉えているのかを明らかにする。

## 2. 教育の基礎としての人智学的人間観

シュタイナー教育の根本をなすのは、人智学的人間学である。この人間学では、子どもの霊性・神性といった目に見えない世界が大切にされる。人智学的人間学では、シュタイナーによれば、子ども(人間)は身体(Leib)、霊(Geist)、および魂(Seele)の3つより成る存在である(Steiner, R. 1919a, S. 91; シュタイナー, R. 1989a, 93頁)。身体は、この世だけに存在し、眼で見ることのできる物質であるが、霊と魂は物質ではない。これらは眼に見えないものであり、子ども・人間の内部の奥にあって働く力である。霊は、身体や魂の最内奥でたえず活動し、すぐれて「創造的」「生産的」に作用する神的な力をその本質とする。魂とは、思考・感情・意志・意欲・欲求・関心・記憶力・意識・・・等々の言葉で表現される力・能力あるいは活動をその本質とする<sup>2)</sup>(Steiner, R. 1920, S. 37)。霊は、この魂に作用し、魂に対して方向や意図を示し、「真理や善に生きる力」を与える。

シュタイナーによると、人間の発達過程は魂、霊、および身体の変化としてとらえられる。シュタイナーは子どもの発達を0~7歳(幼児期)、7歳~14歳(児童期)および14歳~21歳(思春期・青年期)の3つの時期に区分する。身体、魂および霊のあり方が年齢・時期によって異なるために、このように3つに区分されるのだが、シュタイナー教育では、これら3つの発達段階が重視され、各時期の子どもの本性に応じてカリキュラムが組まれ、教育活動・授業が展開される。したがって、子どもの教育に従事する者がまず行わなくてはならないことは、3つの各々の時期の子どもの本性がどのようなものであるかをよく認識し、思春期・青年期以後に展開される人生についてもよく理解しておくことである、とされる。シュタイナーは、このことを、教育者として何よりも大切なことは、人間の生涯の中にいくつかの大きな節目<sup>3)</sup>があることを洞察し、生涯全体がいくつかの時期に区分されなくてはならないことを知ることである、と訴え、さらに続けて次のように述べている。「教師・教育者として、子どもと深く人間的な関係(ein wirkliches, tief menschliches Verhältnis)を取り結ぼうとする人は、まさにこれらの時期についての基本的な認識を持

っていなければなりません」(Steiner,R.1996,S.8)。

### 3. 幼児期の子どもの本性と教育の目標

幼児期は上に述べた三つの時期の第一の段階に相当する。この誕生から歯の生えかわる6、7歳頃までの時期の子どもは、それ以後の子どもとは違ったかたちで活動し発達する。シュタイナーは「人生最初の3年間、ひいては人生最初の7年間というものは、この時期の子どもは後年の時期とは全く違う存在であるがゆえに、人間の生の全展開にとって最も重要である」(Steiner,R.1923b,S.104;シュタイナー,R.1985,140頁)と述べ、この時期を、後の発達過程にとって基礎となる最も重要な時期として位置づける。各々の時期の教育の方法は、シュタイナーにあっては、各時期の人間の本性についてのより詳しい考察および教育の目標の設定と一体になって提示されている。それで、以下では、シュタイナーが主張する幼児の本性と教育の目標を明らかにし、これとの関連で幼児教育の方法としての演劇活動について述べたい。

シュタイナーによれば、誕生から7歳頃までの幼児の本性としては、次の4点が重要である。第一に、身体組織・器官の形成であり、第二に身体活動・運動である。第三に、言葉を話すことおよび思考することであり、第四に、道徳性・宗教性の発達である。幼児はこうした4つの本性をもって生きるが、この4つは、シュタイナーにあっては、同時に幼児教育の目標に直接つながる。幼児の本性を満たすことが、幼児教育の目標とされるからである。

#### (1) 身体の組織・器官の形成

シュタイナーによれば、幼児期には霊と魂と身体の3つが、他のどの時期よりも相互に結合し一体となって成長しようとするが、それらのなかで特に発達が著しいのは身体である。身体とは、脳、心臓、肺、胃、腸、骨格、筋肉等々の身体組織・器官のすべてを言うが、幼児期における身体組織の形成とは、その基本的形体の形成のことを言う。シュタイナーは次のように述べる。

「子どもの肉体の器官は歯が生え変わるまでのあいだに、一定のかたちに形成されなくてはなりません。肉体の器官の構造は、この時期に、特定の方向と傾向を受け取らなくてはなりません。そのあとでほんとうの意味での成長が始まりますが、この成長はその後ずっと、7歳までに作り出された肉体の形態を基礎として生じます。七歳までに正しい肉体の形態が作り出されると、その後、それをもとに正しい形態が成長します」(シュタイナー,R.1999a,63頁)。

人智学的人間学に従えば、人間固有の精神的生活の享受は、決して魂や霊の力だけに依るのではなく、身体力にも基づく。身体は、精神的生活に対する傾向性というものを持っており、身体はこの傾向性が精神的生活の享受に重要な役割を果たすのである。もしもすぐれて崇高な精神的世界に敏感に反応する身体を持つならば、人間は、容易に精神的・道徳的な生活を営み享受することができるとされ、身体組織の正常な形成のために必要なのは、精神的にすぐれた世界に対する傾向性であるという。その傾向性とは、霊や魂が個人の成長・発展のために必要な善や真理、美などのすぐれて精神的な世界に進もうとすると、身体がそれを援助する方向へと進むことをいう(広瀬俊雄1988,98頁)。つまり、人間の身体諸器官は、単に生物学的な生命のための器官ではなく、それは、同時に人間のうちに精神的生活を生み出し支える器官でもある。

シュタイナーによれば、そうした身体組織の健全な傾向性というものは、大人になってから育成されるものではなく、幼児期に形成される。そして、幼児期に形成された身体組織の傾向性は、それ以後の時期に持続し、人間の精神的、道徳的な生活に大きな作用を及ぼすとされる。それゆえ、幼児期の教育は、そのような身体組織の健全な傾向性の形成を目指して行われなくてはならないのである。シュタイナーは次のように述べている。「教育者としての役を務めるものは…健康なる肉体機構の進むべき方向を取って展開するように、方向づけ導いてやるように努めねばなりません」(Steiner,R.1922,S.62;シュタイナー,R.

1981,90頁)。

## (2) 身体の活動・運動

誕生後の幼児の成長を観察すれば分かるように、幼児はまだ立って歩くことができないうちから、手でものをつかみ、這いまわったりころげまわったりして身体をしきりに動かす。そしてこうした身体運動の後に、直立歩行ができるようになる。シュタイナーによると、1歳から7歳までの時期においては、幼児の生は身体運動によって支配されているとされる(Steiner,R.1924b,S.48)。身体運動、特に身ぶり・歩行は、概括的にみれば幼児期全体の特徴とされるが、幼児教育に従事する者は、この身体運動を主として次の理由から教育の目標として重視しなければならない。

第一の理由は、幼児の身体運動が、うちから自然に湧き出てくる「最も内的な衝動」(Steiner,R.1924b,S.47)あるいは「最も根源的な衝動」(Steiner,R.1924b,S.47)に基づくものだからである。

幼児期に身体運動が重視される第二の理由は、身体運動が魂の要素である意志の発達を促すからである。シュタイナーによれば、誕生から7歳頃までは、魂の中の意志が感情や思考よりも著しく発達する。「人間の身体活動は、魂・精神的なものとして意志から生ずるのであり、意志衝動が発出して人間の運動器官の中への流入することなのです」(Steiner,R.1923b,S.127;シュタイナー,R.1985,171頁)。つまり、幼児にあっては、意志が活動しなければ身体運動は生じないのであり、意志の活動が身体運動のかたちで現れるということである。意志の活動は、本来は魂に属することがらである。しかし、6、7歳頃までは、意志は、身体から独立した魂のことがらとしてはいまだ活動できず、身体の中で身体運動というかたちで活動し発達しようとするのである。このことは言い換えれば、感覚器官の活動を含む全身運動が合自然的に行われれば行われるほど意志が発達するということである。このようにシュタイナーが幼児の身体への働きかけを重視するのは、身体運動がそのまま後の魂の形成につながり、身体活動によってとくに意志の発達が促されるからである(Steiner,R.1923b,S.127;シュタイナー,R.1985,171頁)。なお、シュタイナーは、こうした身体活動と意志との関係について演劇論の中でも「身ぶりの中には感情によって満たされた人間の意志の告白が息づいている」(Steiner,R.1924d,S.390)と述べる。

幼児期では、身体と魂の中の意志の二つはまさに一体になっており、意志はたえず感覚器官を支え、これを動かしているのである。シュタイナーは言う。「意志的なものが、歯の生えかわり(7歳頃)までの子どもの身体全体の中で強烈に働きます」(Steiner,R.1923a,S.96)。言うまでもないが、この意志の力は、能動性や自発性(Selbstständigkeit)をその本質とする。それゆえ、子どもは極めて活発に活動する。その活動の活発さに注目すると、これを単に能動性という言葉で表現するだけでは不十分である。それでシュタイナーは、しばしばBedürfnis、つまり「欲求」あるいは「要求」という言葉で子どもの本性の能動性を表現する。彼はまたときには“verlangen”つまり「求める」「要求する」という言葉で表現し、“Das Kind führt sich selbst in diese Bahn hinein”即ち「自分自身でこの道に入っていく」(Steiner,R.1921-22a,S.130)といった言葉で表す。

## (3) 話す力の形成

シュタイナーによると幼児期における「話す能力」と「思考する」能力は、人間の生全体にとって極めて重要な3つの能力、すなわち、歩く、話す、考えるという3つの能力のうちの2つの能力とされ、これらが人生の初期にどのように獲得されるかが考察されねばならない。シュタイナーによれば、話せるようになることが幼児自身にとって重要なのは主として次の3つの理由による。

第一に、シュタイナーが「・・・話すことを学ぶことによって人間は外界との関係を得ます」(Steiner,R.1923a,S.35)と述べるように、話せるようになることで、幼児は外界へと関係づけられるようになる。

第二に、話すことが幼児の身体、すなわち呼吸・循環組織の形成につながる。シュタイナーによれば、話す行為の出現の源泉の一つは、手足の運動に備わる「リズム」と「拍子」にあり(Steiner,R.1923a,S.35)、話す言語それ自体も音楽的な要素、つまりリズムと拍子をその本質とする(Steiner,R.1920,S.137)。それゆ

え、話すことはリズム組織である呼吸・循環組織に作用せずにはおかないというのである。

第三に、話すことが思考・感情・意志といった魂の力の形成に大きな役割を果たすことである。それは魂の力の中でとくに「思考」力の形成に強く大きな作用を及ぼすという。大きな作用を及ぼすとは、話すことが思考活動を生み出すということである。このことをシュタイナーは「話すことが歩行や物の把持、すなわち人間の運動から生じるように、思考は話すことから生じてくるのであります」(Steiner,R.1923b,S.111；シュタイナー,R. 1985,151頁)と述べる。

#### (4) 道徳性・宗教性の形成

シュタイナーは霊性の実在を人間の内部に認めることで、人間は生まれながらに真理や善・美への衝動・欲求を有しているという見解に立っている。真理や善・美に代表される道徳的な感情には、さまざまな感情があるが、シュタイナーにあっては大きく「感謝 (Dankbarkeit)」、「愛 (Liebe)」ならびに「義務 (Pflicht)」(Steiner,R.1923a,S.115) の3つを意味する。なかでもシュタイナーは「感謝の基礎は歯の生えかわり以前につくられねばなりません」(Steiner,R.1923a,S.140)と述べ、幼児期にこの「感謝」の基礎を築くことを重視する。シュタイナーが「愛」や「義務」に比べて、幼児期において「感謝の念」を重視する理由は、彼の次の言葉にみられるように、「感謝」「愛」「義務」という道徳性の発達の種類に対する見方にある<sup>4)</sup>。「感謝の念からは、あらゆるものが芽生えて参ります。私達は感謝の念から、人間の『人を愛する力』や『義務を感じる能力』を成長させることができるのです」。(Steiner,R.1922,S.155；シュタイナー,R. 1981,231頁)つまり、「愛」や「義務」が「感謝」の念を土台に芽生えるゆえに、シュタイナーは感謝の基礎を築くことを重視するのである。さらに、彼が幼児期の道徳教育において重視したものに、感謝の基礎の確立のほか、善に対する好感、悪に対する反感といった道徳的な善の形成を付け加えることができる。

さて、シュタイナーにあっては、とりわけ感謝の念は、単に道徳的な生の基礎の形成に寄与するにとどまらず、さらに宗教性の基礎をつくる働きをする。宗教性の基礎とは神への愛を言う。シュタイナーが「誕生から歯の生えかわりまでの時期に感謝によって生じる愛、それは、神への愛です」(Steiner,R.1923a,S.117)と述べるように、幼児の感謝の対象は他人に対する感謝から、さらにそれにとどまらず、神への愛へと至るのである。

### 4. 幼児教育としての演劇の方法の原理

すでに明らかにしたように、シュタイナーにあっては、幼児期の教育の目標は、身体組織・器官を健全に形成すること、身体を活発に活動させること、言葉を話すこと、思考力の基礎を育成することならびに道徳性・宗教性を育成することにある。では、このような目標をどのようにして達成すべきか、またこれらの目標を成し遂げるためには、いかなる方法に依るべきか。シュタイナー幼稚園では、その方法として、遊戯やお菓子作り、人形劇などさまざまな活動が行われるが、その一つとして、演劇活動が行われる。シュタイナーによれば、どのような教育活動であれ、この幼児期の教育の方法の根本原則は、教育者がすべての教育活動を幼児の本性、すなわち「模倣」性を最大限に配慮して展開しなくてはならないということである。以下では、教育方法としての演劇活動のあり方の原理を具体的に述べるが、まずシュタイナー幼稚園の教育活動の根本を規定する幼児の模倣性と、教育方法としての模倣のありかたについて述べる。続いて、演劇活動において身体組織・器官の形成、身体活動・運動、話す力の形成、宗教性・道徳性の育成という教育目標がどのようにして達成されているかを、シュタイナーの理論にもとづいて明らかにする。

#### (1) 幼児の模倣性

シュタイナーによれば、幼児の注目すべき状態の一つは、幼児が外界・事物に関心を寄せ、それを知覚して生きることであり、しかも幼児はその知覚活動を大人とは違って全身で行う。身体全体で外界を知覚して生きることが、幼児の重要な本性とされるのである。子どもはさまざまな領域に関心を向けるのであ

るが、特に「人間」にはこの上なく強く大きな関心を向ける。ここに言う人間とは、詳しく言えば、人間の「身ぶり」「しぐさ」「態度」「振る舞い」「表情」「声」等のことである。子どもは周囲の人の身ぶりやしぐさ、態度や振るまい等にひときわ大きな関心を示すのである。このことについてシュタイナーは次のように述べる。「子どもは、外界のすべてに対してではなく、あるもののみ関心を示す。即ち、身ぶり (Gesten)、態度 (Gebärde)、さまざまな動きの状態にあるもの (Bewegungsverhältnisse) に対して関心を示すのです」(Steiner, R. 1924b, S. 46)。

しかも、幼児は、他人と一緒にいるとき決して他人の身ぶりやしぐさに関心を示す、すなわち知覚し感知するだけでは満足しない。シュタイナーによると、子どもは、知覚したら次の段階へと進む。次の段階とは「模倣 (Nachahmung)」である。子どもは、周囲の人の身ぶりなどの動きのあるものを知覚すると、それを模倣するのである。シュタイナーは次のように述べる。「子どもは、周囲の人のある動きを知覚する瞬間、自分のうちにその動きを模倣しようとする衝動が起こるのを感じる」(Steiner, R. 1924b, S. 46)。「子どもが何かを知覚した場合、それが運動であろうとも、あるいは音声であろうとも、その子どもの中には、自分の内面性のすべてをかけて知覚したものを自分の中で真似て、同じ形に再体験しようとする衝動が生じます」(Steiner, R. 1922, S. 17; シュタイナー, R. 1981, 19頁)。いかなる幼児も模倣性を持ち、模倣性に生きる。シュタイナーによれば、こうした模倣活動は、幼児が自己を発達させようとして行う最も特筆すべき本性である。この模倣は、幼児期の教育、とりわけその方法のあり方を規定する最も根本的で重要な本性としてとらえられる。

ところで、幼児が全身で模倣する対象は、周囲の人の外に現われた身ぶり、行為、動きである。幼児は、周囲の人の外に現われるもの、つまり、動作、表情、しぐさ、口の動き、四肢の動き、また音声、話し方、言葉……等々すべて感覚器官で把握されるものを模倣するのである。だが、後にも述べるが、シュタイナーによれば、幼児の身体は、単にこうした外面的な身ぶり・姿だけを模倣するのではない。それは、さらに周囲の人の内面の世界・精神的な世界をも模倣する。

言うまでもないが、幼児の接する周囲の人々は、目に見える身振りや行為によってのみ生きるのではない。人々は、自らに備わる霊と魂、とりわけ思考・感情・意志などから成る魂の力によって、さまざまな思い、思想、快・不快や美醜などの諸感情、希望、願ひ……等々、つまり内面的・精神的世界と呼ばれるものを持って生きる。こうした内面的な世界は、表情や身ぶりや行為のかたちで明瞭に外に現われることもあるが、明瞭に現われないことも多い。けれども、幼児にとっては、それが明瞭に現われるとか現われないといったことは問題ではない。幼児は、とにかく周囲の人に大きな関心を持ち、この人の内面的・精神的な世界をも、それが外に現われなくてもかぎとり、模倣するのである。シュタイナーはこのことを「子どもは精神的なものをも内的に身体で模写します」(Steiner, R. 1923b, S. 111; シュタイナー, R. 1985, 151頁) といった表現で述べる。

シュタイナー幼稚園では、園児たちは教師の動作を見てまねて動き演じ、教師の言う言葉をまねて声に出し、教師の歌うのをまねて歌う。模倣の原理はシュタイナー幼稚園における演劇活動全体を貫き、その根底をなしている。一般に模倣については否定的に見る見方が強い。しばしば批判や非難的になる「サルまね」や「模造品」は、それを端的に示している。一般的には否定的に見られる模倣は、しかし幼児の成長という点からみると、価値の高いことがらである。それは模倣の行為が、人間としての証である「学び」あるいは「学ぶこと」「学習」を根本から支えることだからである。シュタイナー教育では、幼児期の子どもの活動について「学び」あるいは「学ぶ」という視点でとらえる。シュタイナーが教えるという言い方をせず、学ぶという言い方をするのは、子どもの本性の特徴である「自発性」「能動性」を何よりも大切にしているからである。

では「学ぶこと」はどのようにして行われるのか。かれによると、それは、まさしく「模倣」によって行われる。かれは言う。「……すべてのことがらは、最初の数年間は模倣 (Nachahmung) によって学び (lernen) とられなくてはならないし、模倣によって周囲の人々から受けとられなくてはならない」(Steiner, R. 1923b, S. 106)。「子どもは生まれてから7歳まで、すべてを模倣をとおして学びます」(シュタイナー, R. 1999b, 160頁)。子どもの学びはこのように模倣と一体のものとしてとらえられるがゆえに、模倣はこの上なく価値の高い重要なものとして位置づけられるのである。

## (2) 身体組織・器官の形成、身体活動・運動としての演劇の方法原理

シュタイナーは、幼児の身体形成の方法として、幼児の身体活動・運動に注目しこれを重視する。すでに述べたように、幼児は、自分のうちに身体を運動させようとする本性・衝動をもって生きる。幼児教育に従事する教育者にとって重要なことは、こうした幼児の運動への衝動・欲求を満たしてやることである。しかし、幼児は、この衝動を他の誰の助けをも借りることなく、自分だけで発動できるものではない。そのためは、他人の助けを必要とする。シュタイナーによれば、幼児の本性に適した、教育者の依るべき援助の方法とは、教育者自身が自分の身体を動かし行動して模範を示すことである。というのは、既に明らかにしたように、幼児が、周囲の人を「模倣」する本性を持つ存在だからである。幼児は、周囲の人の動き、運動を模倣することを通して運動への衝動を発動させ身体運動を行うのである。

たとえば、キリスト降誕劇で、身重のマリアとヨセフが宿を求める場面では、円の中央で、ヨセフとマリア役の園児が宿屋の戸をたたき動作などをする。円になっているその他の園児たちは、教師が「残念ながらこの宿屋は一杯です」と歌いながら（ヨセフとマリアの申し出を）断るしぐさをまねる。園児たちは、教師とともに、歌いながら、ひざまずいたり、手をつないで円を回ったり、全身を使って動作をする。このようにシュタイナー幼稚園でおこなわれる演劇は、身ぶり、しぐさ、つまり幼児の身体活動を重視した活動である。しかしシュタイナーによれば、幼児期の身体活動で重要なのは単に身体を動かせばいいということではない。

では身体活動の教育において、教師が幼児にとっての模範となりうるためには、その身体活動は、どのような特徴を備えていなければならないのだろうか。シュタイナーは、幼児期の身体活動に関して、音楽性・リズム性を重視する。シュタイナーによれば、音楽的な身体活動が必要なのは、それも幼児に宿る重要な本性の一つだからである。「子どものころの音楽的能力は、大抵の場合、三歳から四歳までの間に、特に強く働いています。ですからこのことに気付き、そしてそれを表面的な音楽の勉強と結びつけず、それをその子どもの身体の在り方、特に踊りと結びつければ、とても大事なことを子どもにしてあげられるのです」（Steiner, R.1919b, S.18；シュタイナー, R. 1989b, 16頁）。幼児の身体そのものが、リズムを持った動き、運動をしようとする傾向は、幼児に備わる自然の衝動によるものである、ということもできるが、シュタイナーによれば、リズムをもった身体活動への傾向は、身体内部の諸器官そのもののリズム活動に由来する。シュタイナーは、このことを例えば、「音楽的な体験は、本来、聴覚による知覚とリズム的な呼吸過程のなかにあります」（Steiner, R.1920, S.34）といった言葉で述べる。身体内部の諸器官でリズム活動のさまを最も明確に示すものは、心臓と肺である。この動き・活動の本質は、鼓動と呼吸に示されるように、リズム運動にほかならない。心臓も肺も一定のリズムで動き活動している。人体の中心である心臓や肺の本質がリズム運動にあるということ、この心臓・肺を含む身体の諸器官が幼児期において著しく発達すること、このことから手足をはじめとする、幼児の身体運動のリズム性への傾向が出てくるのである。それゆえ、教師は、できるかぎり幼児の面前ではリズムに乗って身体活動を行い、示さなければならず、シュタイナー幼稚園のキリスト降誕劇では、園児は教師を模倣しつつ、歌を歌い、リズムカルに身体を動かしながら、劇を行うのである。

## (3) 話す力の形成としての演劇の方法原理

幼児は、もし自分の周囲に言葉が話す人が存在せず耳を傾ける言語環境が存在しない場合には、言葉が話せるようにはならない。このことは言い換えると、幼児が、言葉が話すことを「模倣」によって学習することにほかならない。シュタイナーが幼児の話す力の育成に際してまず重視するのは、こうした、幼児の模倣による言葉の習得である。シュタイナーは、「話すことは、まず第一に、耳で聞いた音声を模倣することです」（Steiner, R.1923a, S.37）、「……幼児は、自分の周囲の人々を模倣しつつ言葉を習得します……」（Steiner, R.1923b, S.110；シュタイナー, R. 1985, 149頁）と述べる。言葉をこうしたかたちで習得するのが幼児の本性であるが故に、話すことの教育において教育者が行わなくてはならないことは、幼児の面前で言葉が話し聞かせることである。それゆえ、シュタイナー幼稚園の演劇教育では、幼児に台詞を覚えさせ、言わせるかたちでの言葉の教育を行うのではなく、教師の発した言葉をそのまま真似て発する



ことで言葉の教育を行うのである。

幼児においては、言葉の習得は、たしかに、周囲の人の話す言葉を聞き、これを模倣するという仕方で行われる。しかしシュタイナーにあっては、話すことの教育は、単なる耳と口の問題に限定されない。それは、さらに広く身体全体の問題として把握され、話す力は、根源的には、幼児の身体全体の活動・運動から生じるとされる。シュタイナーは「子どもは、まず身体全体を通して、話すということを始めるのであります」(Steiner, R. 1923b, S. 110; シュタイナー, R. 1985, 149頁)と述べるが、それゆえシュタイナーにあっては、話し方の教育で重視されなくてはならないのは、歩く、腕を動かす…といった身体運動である。言葉話す力をつかさどるものは頭部の脳の働きにあるが、この脳の働きを促すのは全身の活動だからである。手足の運動、全身の活動から頭部の脳の活動が生じ、そこから話す力が生じてくる。

演劇はまさに生きた言語教育だが、シュタイナー幼稚園の劇では、教師が模範として言うセリフには必ずその言葉の示す事物や動作がともなう。先のキリスト降誕劇の例で言えば、教師がヨセフのセリフ、すなわち「トン、トン、トン、どなたかいませんか、今夜一晩とめていただきたいのですが」というセリフを言うときには、言葉と同時に宿の戸をたたく動作を幼児もともにやる。こうするのは、幼児にあっては、それが示す事物や動作との対応で言葉を習得することによって、言語能力が健全に発達するからでもある。幼児は、単に教育者が口に出している言葉をまねして習得するのではない。幼児期において、話すことは人間の運動器官全体から生じ、身体活動・運動、それも先に述べたように、リズムに満ちた身体運動を行うことなかで言葉を習得していくのである。

また、シュタイナー幼稚園では、園児たち一人一人にセリフを覚えさせ、言わせるかたちはとらず、あくまで園児たちは教師のセリフを真似して言うだけである。キリスト降誕劇のセリフは、大人の間で使用される知的な言葉(劇中の独特な言葉等)も多い。幼児一人一人にそれらを正しく覚えさせ言わせることを避けるのは、幼児期の子どもはまだ、知的なものを欲さないという幼児期の子どもの本性に関する認識から導き出されたものでもある。他方、日本の幼稚園で行われる劇は、これとはまったく違って、園児一人一人にセリフが与えられる。園児は、自分でセリフを覚え、保護者をはじめとする皆の前で言わなくてはならない。たしかに大人のセリフも訓練させれば、幼児でも言うことができるようになる。大人が目を見張るほど上手に言うことができる幼児もいる。しかし、両者の劇からうかがえる言葉の教育に関する大きな違いは、日本の幼稚園では、必要に応じて、子どもの欲求があるなしにかかわらず言葉を教え、話す訓練をさせるのに対して、シュタイナー幼稚園ではそのようなことは一切しない、ということである。

シュタイナー幼稚園では、幼児に、「このセリフは、このように言うのですよ、さあ、口に出して言ってごらん」などといったやり方は意図的に排除し、決して行わない。このようなやり方は、強制的な色彩が濃い。シュタイナー教育で用いられるのは、強制的な要素を一切とり除いた、幼児の自由意志に基づく「模倣」である。幼児は、教師が模範として示す言葉を、自発的に模倣して習得するのである。シュタイナーの重視する幼児の模倣活動は、フレーベルの言う「自己活動に基づく模倣」活動である。したがって、幼児教育に従事する教育者が留意すべきことは、幼児が自ら進んで模倣しようとする状態をつくり出すことであり、幼児の目前で模範的活動をみせつつ、幼児が模倣活動を自らの力でやるに至るときをじっと待ち見守ることである(広瀬俊雄 1988, 126頁)。

#### (4) 道徳性・宗教性の育成としての演劇の方法原理

シュタイナーによると、幼児期の子どもは、他の時期の子どもと違って、自分の周囲にいる人の心の中の思いも外に現われた行為をも、そのすべてを道徳的にみてよいものと無意識に信じて模倣しようとする。幼児期の子どもは大人とは違う存在である。大人は一般的に周囲の人の身ぶりや目つきを見て、そこからその人の心の中の道徳上の思いを読み取るまでに至らない。しかし、子どもは違う。シュタイナーによると、幼児は周囲の人の身ぶりや目つきを見てそこから心の中の道徳上の思いを読み取り、しかもそれを全身で模倣し吸収してしまう。恐ろしいことに、シュタイナーにあっては、全身で模倣し吸収してしまう、周囲の人の道徳的な思い、とりわけ邪悪な醜い思いなどは、子どもの後の生涯の中で身体を蝕む力として作用し、病気を生み出す原因の一つとさえなる。それゆえ、シュタイナーは次のように述べる。「重要な

ことは、私たちが親、あるいは教師として子どもの周囲で単にあつかましくも眼に見えるような不埒な行為はしないということだけではなく、心のうちに真実の思いや感情を持ち、心のうちに道徳的な思いや感情を持たなければならないということです」(Steiner,R.1923b,S.107;シュタイナー,R.1985,145頁)。

幼児期の道徳性の教育で重視されなくてはならないのは、幼児の知性に訴えることを主眼とする説教、言葉の内容自体よりも、大人のしぐさ、身ぶり、言動などに潜む心の中の道徳性と宗教性のあり方であり、さらにそれらの思いをできる限り実行して生きるということである。したがって、幼児期の教育において最も重要なことは、模範たる教育者の内面の優れた道徳性と宗教性が、教育者自身の現実生活におけるすべての言動の端々にまで無意識に自然に表現されるように、自己教育を行わねばならない、ということにある。というのは、幼児期の子どもは、周囲の大人の言動の中で、とりわけ道徳的・宗教的な要素を敏感に知覚して模倣し、自己の道徳性の基礎として形成する(Steiner,R.1924a,S.35)、すなわち道徳的なものは周囲の人を模倣することによって生じるからである。教育者の心の中の道徳上の思いが子どもの成長に及ぼす影響の大きさを深く認識するからであろう、シュタイナーは「この、教育者の心の中の道徳上の思いに基づく教育が、歯の生えかわりまで(幼児期)の子どもにとっては、最も重要なものです」(Steiner,R.1924a,S.35)と主張するのである。

いうまでもなくキリスト降誕劇を生み出す精神的世界は、敬虔な宗教的世界である。教師自身が、どのような思いを抱いてキリスト降誕劇を行うかはとても重要なことである。幼児の前に立つ教師自身が、キリストの誕生を心から祝福し、神、およびキリストに対する感謝や愛をもってキリスト降誕劇を行うこと、さらに幼児に対する信頼、感謝の念をもって、幼児の前に教育者として立つことではじめて、敬虔な宗教的世界や道徳的な思いは、幼児の心の奥深くまで浸透していくのである。

### 演劇活動と教師の役割—まとめにかえて—

さて、これまで見てきたように、子どもが模倣によって学ぶということから、子どもが学ぶときにはどれほど周囲の人、つまり教育者との関係が重要であるかが分かる。それは模倣することが教育者その人を模倣することであり、教育者との関係の中で模倣することだからである。シュタイナー教育の最も大きな特徴の一つは「子どもと教師との教育的な関係」の重視にあると言っても過言ではない。どちらかといえば子どもが教師とじかに接する活動ではない人形劇や自由遊びと異なって、すでに述べてきたように、演劇活動は教師のあり方が最も重視される教育活動であるといえよう。シュタイナーは「重要なのは教育や授業の根本問題が教師の問題だということです」(Steiner,R.1924a,S.22)と述べるが、子どもが自分の前に立つ大人の外面だけでなく、その内面にも目を向け、その内面をも模倣し、それを糧に魂や身体などを成長させようとする本性を持つことを考えると、教育者のあり方、すなわち教育者が持つ内面の世界はこの上なく重要である。このように教師の内面をすべての基盤として、模倣の原理に基づき、身体組織・器官の形成、身体活動・運動、話す力の形成、道徳性・宗教性の育成を行うのがシュタイナー幼稚園の演劇活動である。シュタイナー幼稚園では、子どもの本性を深く理解することで、教師が幼児の成長に及ぼす作用の大きさや重要性を深く認識し、理解し、子どもと教育者との関係を十分に考慮した教育実践として演劇活動が行われているのである。

以上、シュタイナーの教育理論に基づいて、幼児期の子ども本性を明らかにし、そこから導き出される幼児教育の目的を述べた。さらにその目的を達成するための教育の方法原理としての演劇について、シュタイナー幼稚園で頻繁に行われるキリスト降誕劇を例にとって明らかにした。たしかにシュタイナー幼稚園の演劇は、まだ、私たちの想像するいわゆる「演劇」には程遠い。本格的な演劇活動が行われるのは、児童期、青年期、つまりシュタイナー学校においてである。シュタイナー学校では、演劇活動はシュタイナー学校の教育課程の中核に据えられ、その内容、目的、具体的な方法のいずれをとっても、シュタイナー幼稚園での演劇活動とは全く異なる。シュタイナー学校における本格的な演劇活動については、稿を改めて論じたい。

## &lt;注&gt;

- 1) シュタイナー幼稚園・学校でよく使われる竖琴のような楽器。
- 2) シュタイナーは特に思考、感情、および意志の3つをもって魂を代表させる。
- 3) ここにいう節目とは、幼児期、児童期、青年期のことである。
- 4) シュタイナーによれば、感謝の念が築かれるのは、誕生から歯の生えかわりまでの幼児期においてであり、愛の基礎が確立するのは、歯の生えかわりの7歳頃から第二次成長の目立つ14歳頃までの児童期である。そして義務は、14歳以後にこれらの感謝と愛の基礎の確立の上に形成される。

## &lt;引用・参考文献一覧&gt;

## I シュタイナー全集 (Rudolf Steiner Gesamtausgabe)

シュタイナー作品のほぼ全部を取めたこの全集はスイスのドルナッハ (Dornach) にあるルドルフ・シュタイナー出版社 (Rudolf Steiner Verlag) より刊行されているものであるが、これをGAの略号をもって示す。なおこの略号の数字はこの全集の巻数を示す。

- Steiner,R.1919a : *Allgemeine Menschenkunde als Grundlage der Pädagogik* (GA293) .  
 Steiner,R.1919b : *Erziehungskunst. Methodisch- Didaktisches* (GA294) .  
 Steiner,R.1919c : *Erziehungskunst. Seminarbesprechungen und Lehrplanvorträge* (GA295) .  
 Steiner,R.1919d : *Methodik und Wesen der Sprachgestaltung* (GA280) .  
 Steiner,R.1920 : *Die Erneuerung der pädagogisch- didaktischen Kunst durch Geisteswissenschaft* (GA301) .  
 Steiner,R.1921-22a : *Die gesunde Entwicklung des Leiblich-Physischen als Grundlage der freien Entfaltung des Seelisch-Geistigen*(GA303) .  
 Steiner,R.1921-22b : *Erziehungs-und Unterrichtsmethoden auf Anthroposophischer Grundlage* (GA304) .  
 Steiner,R.1922 : *Die geistig-seelischen Grundkräfte der Erziehungskunst. Spirituelle Werte in Erziehung und sozialem Leben* (GA305) .  
 Steiner,R.1923a : *Die pädagogische Praxis vom Gesichtspunkte geisteswissenschaftlicher Menschenerkenntnis. Die Erziehung des Kindes und jüngeren Menschen* (GA306) .  
 Steiner,R.1923b : *Gegenwärtiges Geistesleben und Erziehung* (GA307) .  
 Steiner,R.1924a : *Anthroposophische Pädagogik und ihre Voraussetzungen* (GA309) .  
 Steiner,R.1924b : *Der pädagogische Wert der Menschenerkenntnis und der Kulturwelt der Pädagogik* (GA310) .  
 Steiner,R.1924c : *Die Kunst des Erziehens aus dem Erfassen der Menschenwesenheit* (GA311) .  
 Steiner,R.1924d : *Die Konstitution der Allgemeinen Anthroposophische Gesellschaft und der Freien Hochschule für Geisteswissenschaft* (GA260A) .  
 Steiner,R.1924e : *Die Methodik des Lehrens und die Lebensbedingungen des Erziehens*(GA308).  
 Steiner,R.1996 : *Die religiöse und sittliche Erziehung im Lichte der Anthroposophie : in Einzelausgabe aus den 297a der Rudolf steiner Gesamtausgabe*

## II シュタイナー作品の翻訳書

- シュタイナー, R. 1981『教育の根底を支える精神的心意的な諸力』新田義之訳、人智学出版社 (原典、GA305)。  
 シュタイナー, R. 1985『現代の教育はどうあるべきか』佐々木正昭訳、人智学出版社 (原典、GA307)。  
 シュタイナー, R. 1989a『教育の基礎としての一般人間学』高橋巖訳、筑摩書房 (原典、GA293)。  
 シュタイナー, R. 1989b『教育芸術1 方法論と教授法』高橋巖訳、筑摩書房 (原典、GA294)。  
 シュタイナー, R. 1989c『教育芸術2 演習とカリキュラム』高橋巖訳、筑摩書房 (原典、GA295)。  
 シュタイナー, R. 1999a『霊学の観点からの子どもの教育』松浦賢訳、イザラ書房。  
 シュタイナー, R. 1999b『人間理解からの教育』西川隆範訳、筑摩書房 (原典、GA311)。

### Ⅲ 研究書その他

カールグレン,F. 1992 国際ヴァルドルフ学校連盟編『自由への教育』高橋巖・高橋弘子訳、ルドルフ・シュタイナー研究所。

富田博之 1993『演劇教育』国土社。

広瀬俊雄 1988『シュタイナーの人間観と教育方法』ミネルヴァ書房。

広瀬俊雄 1994『ウィーンの自由な教育—シュタイナー学校と幼稚園—』ミネルヴァ書房。

ベルン自由教育連盟編1980『授業からの脱皮』子安美知子監訳、晩成書房。

ヤフケ,Ch.1988「シュタイナー学校の演劇教育」日本演劇教育連盟編『世界の演劇教育に学ぶ—演劇教育実践シリーズ⑱—』晩成書房。

## **Theory and Practice of Drama activity in the Steiner Kindergarten**

HIROSE Ayako

Rudolf Steiner is known as philosopher, anthroposopher and educator. This paper tries to investigate the purpose of drama activity, especially taking the Advent drama as an educational method in the Steiner kindergarten based on his educational theory. He attaches importance to infant's nature to form body organization, body activity, ability of speaking, development of morality and religious nature. The aim of education in the period of infant is to satisfy infant's nature. Therefore drama activity is organized based on the principle of imitation as a method which develops infant's body organization, body activity, ability of speaking, morality and religious nature. The difference in the drama activity between Japanese kindergarten and Steiner kindergarten is the position of teachers. Teachers in the drama activity in the Steiner kindergarten take the initiative in the drama, play with infants and become models for infants. This is the most important aspect of educational method in the Steiner kindergarten, because imitation as infant's nature is fundamental in the education of infant.